

「単元構成シート」や「文中式ノート 検定」で思考力、判断力を測る

福岡県 朝倉市立十文字中学校

朝倉市立十文字中学校では、形成的評価を取り入れた単元構成と共に「単元構成シート」や「文中式ノート検定」を通じて生徒の思考力や判断力の伸びを把握している。併せて、教師の生徒を見取る力を組織的・効率的に高めていくために、ルーブリックを活用した授業改善システムを構築し、より質の高い授業の実現を目指している。

形成的評価を行い 達成度に応じて授業を変える

朝倉市立十文字中学校では、佐々木隆良校長の下で、授業改善・評価、キャリア教育の充実などの学校改革に取り組んできた。佐々木校長は学校の現状を次のように話す。

「本校の生徒は純朴ですが、地域唯一の中学校であり、切磋琢磨する経験の少なさから競争心が希薄で、自ら目標を立てて頑張る力が弱いと感じています。以前よりも都市部で仕事をする保護者が増え、『少しでもいい高校や大学に進学させてほしい』『子どもを

大切に育ててほしい』という要望は年々強くなっているように感じます。確かな学力を保証し、地域の未来を支える社会性と公共性を身に付けた人材を育てなければならないという使命を感じています」

同校が目指すのは、未来を切り開く力の育成だ。そのためには、生徒が高い志を持ち、自ら学び続ける力を身に付ける必要があると考え、教科指導や「総合的な学習の時間」、課外活動など、あらゆる活動をこの力の育成の下に位置付け、学校改革を進めてきた。

教科指導では、各教科の授業内容を素材として活用しながら、知識や技能を身に付ける

「習得サイクル」と、自分でテーマを設定し追求する「活用サイクル」の2つのサイクルを、相互に変化・作用させながら学びを循環させる力を身に付けてほしいと考えている。そこで、同校が行う工夫の1つは、形成的評価を取り入れた単元構成だ。形成的評価とは、通知表や指導要録のための評価とは異なり、教師が生徒の学習解度を把握し、授業改善やカリキュラムの修正に生かすために行う評価のことだ。同校は、単元開始前に行う「診断的評価」、単元の途中で行う「形成的評価」、定着度を測る「総括的評価」の3つを組み合わせて単元を構成している(図1)。

School Data

◎1977(昭和52)年開校。福岡県から2011年度に「ふくおか学力アップ推進事業」、12年度に重点課題研究の指定を受け、「基礎・基本を習得・活用する学習活動の創造～形成的評価を位置づけた単元構成の工夫を通して」に取り組む



校長◎佐々木隆良先生

生徒数◎149人 学級数◎8学級(うち特別支援学級2)

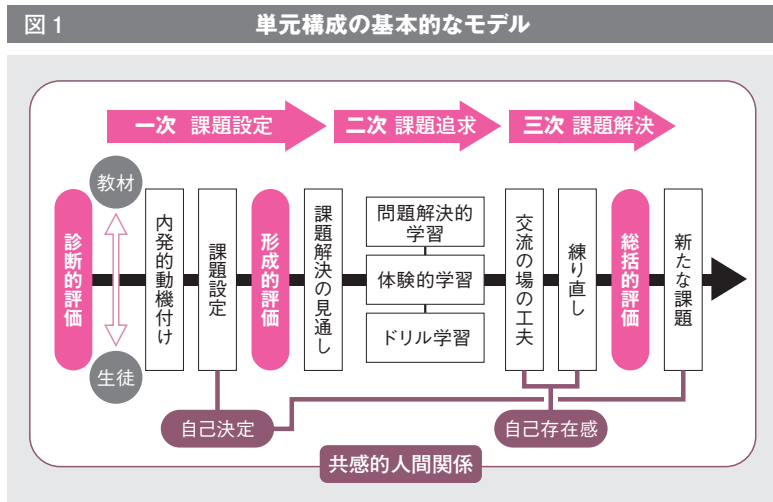
所在地◎〒838-0023 福岡県朝倉市三奈木十文字 3710

TEL◎0946-22-3106

URL◎<http://www.asakura-fko.ed.jp/jumonjichu/>

公開研究会◎2012年11月15日(木)

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む



* 同校の資料を基に編集部で作成

診断的評価は、単元に関する知識について生徒の理解度や習熟度を把握することを目的とし、単元開始前の授業や朝学習の時間に小テストの形で行う。研究主任の和田淳子先生はこう説明する。

「教師の想定よりも小学校での学習内容を理解していない、逆によく理解しているということはよくあります。教師の感覚ではなく、目の前の生徒の理解度や課題に応じて授業の導入や単元構成を考えることが大切です」

で、単元前半の理解度の確認と、理解に至るまでの思考や判断の過程を見取るグループワークやワークシートを出す。この結果を基にその後の授業内容を修正し、最後に総括的評価で定着度を測る。

「形成的評価を位置付けた単元構成を意識して取り入れることで、授業前後の生徒の思考や判断の変化をより丁寧に見取ることが出来るようになりました。これらは効率的に授業改善を行っていく上でも役立っています」

予想と結果のズレが 学びへの期待感を高める

この3つの評価を柱としながら、毎時間の授業でも生徒の思考力、表現力の見取りを心掛ける。数学科担当の和田先生の「確率」の授業を例に、その方法を見てみよう。

参観したのは、「一次 課題設定」に当たる内発的な動機付けや課題設定を意識した「サイコロの目の出方を調べる方法を考える」授業だ。まず生徒に「☆が3つ、○が2つ、×が1つ書かれたサイコロ2個を同時に転がした時、一番出やすい組み合わせは何か」という課題を問い掛ける。生徒の予想は、☆2つが16人、☆○が1人、他は0人だった。次に「どのように予想を確認すればよいか」と生徒に質問し、生徒が提案した3つの方法でそれぞれグループに分かれて確認した。2個のサイコロを転がして出た目を記録するゲ



朝倉市立十文字中学校校長
佐々木隆良 ささき たかよし
「学校の使命を果たすために、巻き込み巻き込まれる関係が出来るシステムを構築したい」



朝倉市立十文字中学校教頭
堺和弘 さかい かずひろ
「時代は変わっても教育の不易と流行を見極めて、今求められる最善の教育を提供したい」



朝倉市立十文字中学校
朝妻浩慶 あさづま こうけい
主幹教諭。「教育者としての誇りを持ち、生徒や家庭・地域が誇りに思う学校をつくりたい」



朝倉市立十文字中学校
和田淳子 わだ じゅんこ
研究主任、数学科。「竹」のように真っすぐに伸び、強く、しなやかな生徒を育てたい」

ループ、樹形図をつくり、出る目のパターンを図示化するグループ、表を使ってサイコロの組み合わせを全て書き出すグループである。3つのグループの解答は、いずれも「☆○の組み合わせが最もよく出る」だった。これを受け、和田先生は「☆は3つもあるのに、どの方法で調べても☆○が多いのはなぜか」と生徒に投げ掛けた。

「それぞれの方法で自分の手を動かし、自分たちが出した答えと予想のギャップを感じてほしいと思いました。『なぜ』という疑問が『知りたい』という欲求につながるからです」

*プロフィールは取材時（2012年3月）のものです

「単元構成シート」で 思考力・表現力を測る

和田先生が生徒の思考力・表現力を見取る上で重視するのは、生徒が記入する「単元構成シート」だ。「今日のまとめ」にその日の授業で新しく分かったこと、「振り返り」には①感想、②記述、③検討、④反省、⑤発展（気付きや疑問）を書く。和田先生は、生徒が⑤発展まで書くことを目標としている。

「本校では、計算問題の正答率は比較的高いのですが、文部科学省の全国学力・学習状況調査のB問題のような活用力を問われる問題では正答率が下がります。日頃から自分の思考を振り返り、言葉で説明することが、活用力や表現力の向上につながると考え、単元構成シートを活用しています」（和田先生）

1年生のうちには感想を書くだけの生徒が多いが、慣れるにつれて反省、発見、疑問といった新しい気付きも書くようになっていく。今回の授業は単元の導入部分だったこともあり、多くの生徒が「なぜ☆○が一番多いのかわりたい」「なぜ予想とずれていたのかを調べたい」と書いていた。思考の振り返り、表現力という意味ではまだまだだが、単元に対する期待を強く抱いた様子はいかがか。

その後の授業は、「二次 課題追求」「三次 課題解決」の前にそれぞれ小テストを行い、定着度も踏まえながら授業を進める。この小

テストの結果は少人数授業のグループの分け方にも活用する。また、グループは単純分割、習熟度別、本人の希望別など、単元の特性や授業のねらいに応じて変えている。

「習熟度や本人の自己決定を踏まえた学習の場を設けることで、基礎・基本の習得はもちろん、自分で設定した課題を解決する力に身に付きます。また、グループで自分の考えを伝え合う活動を取り入れることで、生徒が自分と異なる考えに気付く姿や過程を見取することも出来ます」（和田先生）

このように、書かせたり話したりする活動を通して、生徒の思考や判断を可視化し、見取る活動は全ての教科で行っている。例えば、保健体育では、最初に試しのゲームを行い、その結果を基に課題を設定、有効な戦術や練習を考えさせ、文章や図にかかせる。これにより、「Aはオーブンスペースや連携パスの活用についても触れられている」など、どのような技能が含まれているかを見て評価できるといふ。堺和弘教頭は次のように話す。

「実技での思考力・判断力・表現力を評価するために、文章や図で可視化することを大切にしています。知と体を連動させる指導が技能の向上にもつながると考えています」

また、道徳の授業での見取りについて、主幹教諭の朝妻浩慶先生は次のように話す。

「授業で震災時に防災放送を続けた女性の判断を題材にした時、生徒に自身の考えや生

き方と真剣に向き合い、悩む姿が見られました。女性の判断に賛成なら青印のコップ、反対なら赤印のコップを机に出して意思表示をさせました。何度もコップを入れ替える姿から、心の迷いが見て取れました。具体的な考えや心の変容は記述させないと分かりませんが、授業者だからこそ見える生徒の姿や手応えも見取りの1つとして大切にしています」

「文中式ノート検定」で 思考のプロセスを整理

同校は、授業のノートも生徒の思考過程を知る素材として重視し、「文中式ノート検定」で評価している。これは、週ごとに教科を決め、全校集会時に教師全員で生徒全員のノートを見て、級を与えるというもの。授業で学んだ内容を自分の言葉でまとめ直す重要性を伝え、生徒に思考を整理するきっかけとしてもらうことがねらいだ。上の級を目指し、より真剣に授業に臨む生徒も増えているという。また、文中式ノート検定は、教師が他教科の授業内容を知る機会にもなるという。

「生徒が書いたノートは、授業内容を凝縮したものです。教科担任がどのように授業を構成し、指導しているのかは、生徒のノートを見ればよく分かります。教師が良い授業をして板書もきちんとすれば、生徒の学力は伸びます。そうした意識を教師に持ってもらうことも、ノート検定を行う理由です」（堺教頭）

「思考力・判断力・表現力」を評価し、育む

**ルーブリックを使い
評価を指導改善に生かす**

同校では、研究授業評価指標（ルーブリック、図2）を活用し、生徒への評価と教師の授業力向上を一体化させた「授業改善システム

図2 理科のルーブリック (例)

本時の主眼
○高気圧と低気圧のつくりを理解し、気圧配置図を見てそのようすをつかむことができる。
○気圧配置図からその風の向きと強さを説明できる。

評価項目	4	3	2	1	評定	代案および評価の根拠
主眼の達成状況	ほとんどの生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解し、その風の向きや強さを気圧配置図から説明できる。	約70%の生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解し、その風の向きや強さを気圧配置図から説明できる。	約半数の生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解し、その風の向きや強さを気圧配置図から説明できる。	ほとんどの生徒が高気圧と低気圧のつくりを理解できず、その風の向きや強さを気圧配置図から説明できない。		
手だての有効性	作図による演習の活用によって、理解が深まり、科学的思考力が高まっている。	約70%の生徒が作図による演習の活用によって、理解が深まり、科学的思考力が高まっている。	約半数の生徒が作図による演習の活用によって、理解が深まり、科学的思考力が高まっている。	作図による演習の活用による効果がほとんどない。		
指示・発問	発問・指示が適切でほとんどの生徒によく伝わっている。	ほぼ70%の生徒にしか発問・指示が伝わっていない。	ほぼ半数の生徒にしか発問・指示が伝わっていない。	ほとんどの生徒に発問・指示が伝わっていない。		

2年生理科「前線と天気の変化」のルーブリック。*同校の資料をそのまま掲載

また、教科の壁を超えて教師の足並みをそろえることが出来るのも、このシステムの利点だ。朝妻先生は次のように述べる。

「無駄に褒めない」といった会議のルール、またルーブリックで授業改善の視点を事前に焦点化しておくことを大切にしている。「学校が取り組むべき課題はたくさんあります。だからこそ会議の効率化を図るなど時間を捻出する努力が大切です」(佐々木校長)

授業を通して生徒が学力や表現力を高めたかどうかを確認すると共に、それが達成できたかどうかを他教師が客観的に見ることで、授業力の向上に結び付けようというわけだ。模擬授業や授業整理会は、毎週木曜の放課後に30分以内で行う。

「教科の区別なく、共通の視点で授業の改善点を出し合うことで、教師が同じベクトルで研究に取り組めることが、本システムの良いところだ。共通の基準で授業を批評し合うことにより良い意味でのライバル心が生まれ、授業の質が飛躍的に向上したと思います」

校長として心掛けていること

改革を推進するには、まず学校の現状を否定することから入るのが重要だと考えます。それはつまり、課題を明確に認識しなければ、前へと進めないからです。ビジョンを打ち出し、それを教頭や主幹、研究主任にしっかり伝える。そして、何よりも大切なのは、全ての先生からアイデアを出してもらい、吸い上げることです。全教職員の創意工夫が生かされる学校づくりが、組織を活性化し、生徒を変える力になると考えます。

「取り組み前から必ず効果が出ると確信を持って着手できる活動はありません。大切なのは、成果が見えない取り組みでも、決して手を抜かずに取り組むことです。教師一人ひとりが課題を見付けながら、より良いものに改善していく努力の積み重ねが、結果的に学校を変えていくのだと思います」(朝妻先生)